

浄土三部経ノート

広島仏教学院「仏教・真宗入門オンライン講座」2021 山上正尊案

設^{セツ}我^ガ得^{トク}佛^{ブツ}・十^{ジュ}方^{バウ}衆^{シュ}生^{ジヤウ}・至^シ心^{シン}信^{シン}樂^{ギヤウ}・欲^{ヨク}

生^{シヤウ}我^ガ國^{コク}・乃^{ナイ}至^シ十^{ジュウ}念^{ネン}・若^{ニヤク}不^フ生^{シヤウ}者^{ジャ}・不^フ取^{シユ}

正^{シヤウ}覺^{ガク}・唯^{ユイ}除^{ジヨ}五^ゴ逆^{ギヤク}・誹^ヒ謗^{ボウ}正^{シヤウ}法^{ボウ}・

諸^{シヨ}有^ウ衆^{シユ}生^{ジヤウ} 次第取
聞^{モン}其^ゴ名^{ミヤウ}號^{ゴウ}

信^{シン}心^{ジン}歡^{カン}喜^ギ 同
乃^{ナイ}至^シ一^{イチ}念^{ネン} 同

至^シ心^{シン}廻^エ向^{コウ} 同
願^{ガン}生^{シヤウ}彼^ヒ國^{コク} 同

即^{ソク}得^{トク}往^{オウ}生^{ジヤウ} 同
住^{ジュ}不^フ退^{タイ}轉^{テン} 同

唯^{ユイ}除^{ジヨ}五^ゴ逆^{ギヤク} 同
誹^ヒ謗^{ボウ}正^{シヤウ}法^{ボウ} 同
一^{ウツリ}宮^{ミヤ} 一^{ミヤ}宮^{ミヤ} 一^{ミヤ}宮^{ミヤ} 一^{ミヤ}宮^{ミヤ}

第1回 三部経には何が書いてある？

- 4 「浄土三部経」って何？
- 6 科段（段落分け）

第2回 『大経』本願文

- 11 親鸞聖人が読んだ本願文
- 13 法蔵菩薩の言葉として読んでみた
- 14 機受の全相
- 15 唯除

第3回 『大経』真実の教

- 16 経の大意
- 16 真実の教
- 17 聴聞
- 19 できるようになった
- 20 本願成就文 機受の極要
- 21 如来の回向
- 21 その他この文からわかること
- 22 「資料」親鸞聖人が読んだ本願成就文

第4回 『観経』

- 26 語句「観」
- 27 観経の読み方
- 30 【参考】九品の行と来迎と讃嘆

第5回 『小経』／まとめ 三経の内容

33	まず、お聖教と科段とを見て、何が書いてあるか知ろう
34	小経の読み方
35	三経の内容をおさらい
36	三経一論と『教行信証』

第1回	2021.04.21
第2回	2021.05.19
第3回	2021.09.22
第4回	2021.10.20
第5回	2021.12.08

第1回 三部経には何が書いてある？

「浄土三部経」って何？

A

『仏説無量寿経』

『大経』

『仏説観無量寿経』

『観経』

『仏説阿弥陀経』

『小経』

Q 「仏説」って何？

A 釈尊の説法

苦	生老病死 愛別離苦 怨憎会苦 求不得苦 五蘊盛苦	応病与薬
集	貪欲 瞋恚 愚痴	病人
滅	煩惱が吹き消された安楽な生き方	病の原因
道	滅諦に至る方法	健康態
		薬・治療

Q 苦とは？

A 『釈尊の教えとその展開 ―インド篇―』（勸学寮）42頁 「一切皆苦」の説明

無常を常と誤解している。

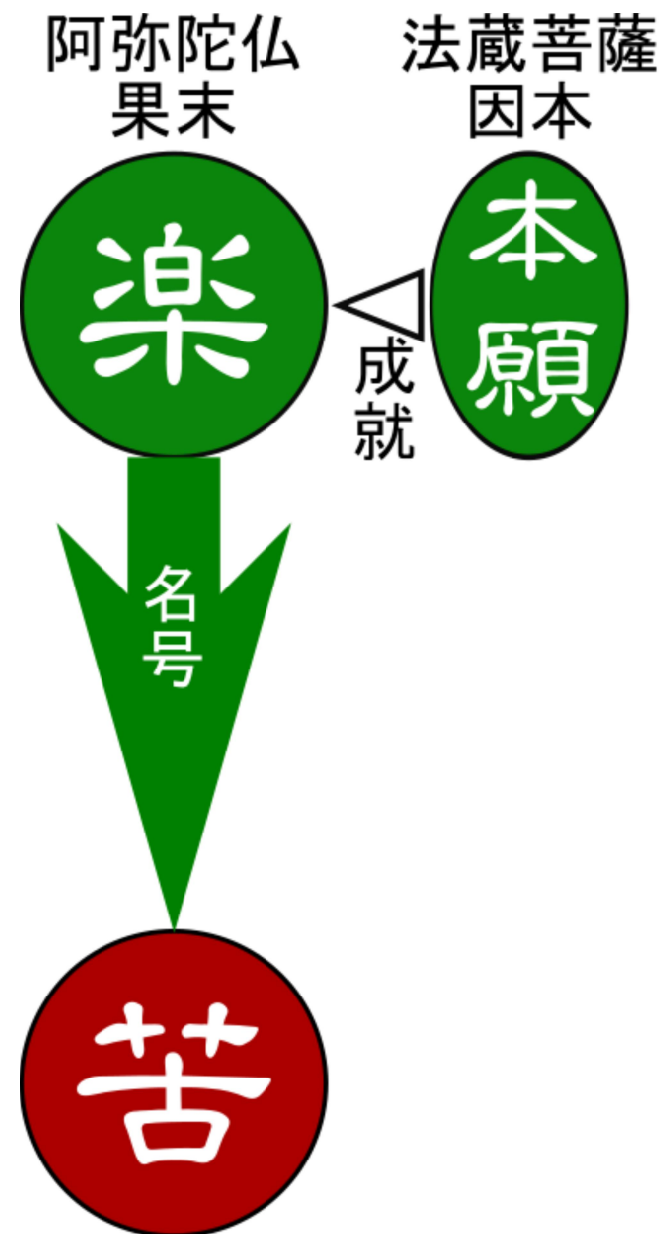
無我なるものを我であると執着している。

私たちの理解と現実の有様のギャップを指して仏教では苦という。

★「常識やあるべき論」……縁によって変化していく価値観……無常

それを常なるものと認識しているところに苦が生まれる。

五蘊	山上の体験	外のものを認識していく過程
色 私にとらえられるものすべて	学校からの肥満判定 「デブ」「豚」「やせなさ」と 毛深い「ムダ毛」「あれ人間か？」	文字や声（言葉）
受 対象物を受け入れる	通知表の文字を見た 声を聞いた	網膜にうつした 鼓膜が震えた
想 心に入る	「あるべき相」が心に届いた	受け取った物を理解する
行 心が動く	「あるべき相」と私は違っている 私はダメ人間か？ 私だけみんなと違う あいつはいやなやつだ やせてかっこよくなりたい 胸毛は気になる。治るものではない。 治すべきものではない。	さまざまな気持ちが起こる
識 記憶する	「常識とずれた私」を認識 この記憶が新たな苦しみを引き起こす	心に刻まれる



苦から楽への仏教

諸仏の道諦

ほとんどの薬は自業自得 廃悪修善によって楽果を得る

医者のおすすめ

楽から苦への仏教

苦しみの連鎖から抜けられない人に専門医を紹介する

……浄土三部経の説法

Q 三部経には何が書いてある？

A 大経 因（法蔵菩薩）と果（阿彌陀仏）

観経 凡夫は名を持って

小経 果（阿彌陀仏）

おまけ

譬喩三大部	『雜法藏經』『賢愚因緣經』『撰集百緣經』
大日三部經	『蘇悉地經』『大日經』『金剛頂經』
法華三部經	『無量義經』『妙法蓮華經』『仏説觀普賢菩薩行法經』
弥勒三部經	『弥勒大成仏經』『弥勒下生經』『觀弥勒菩薩上生兜率天經』
鎮護国家の三部經	『法華經』『仁王經』『金光明經』

科段（段落分け）

『浄土三部経と七祖の教え』勸学寮編

山上のメモ

序分		正宗分		流通分	
証信序	六事成就 八相化儀	法蔵発願	法蔵修行	衆生往生因	衆生往生果
發起序	五徳瑞現 出世本懐	五十三仏 讃仏偈 思惟摂取 四十八願 重誓偈	十劫成道 光明無量 十二光 三塗見光 壽命無量 聖衆無量 宝樹莊嚴 道樹樂音莊嚴 講堂宝池莊嚴 眷属莊嚴 華光出仏	第十一・十七 ・十八願成就 三輩往生 往觀偈	淨穢欣厭 弥勒領解 五善五惡 靈山現土 胎化得失 十方来生 弥勒付属 特留此経
新制三部経で読経するところ		因		勸誠	
ピンク塗り は		仏 こんな生き方したい 浄土 こんな国を建てたい 衆生 このように救いたい、		気つけやあ 弥勒諸天人等 弥勒諸天人等 弥勒 阿難 阿難 阿難及慈氏菩薩 弥勒	
		果			
		できるようになった			

序分	
証信序	発起序
「如是我聞」だけ	化前序
「一時」から	禁父縁
釋尊のいる耆闍崛山に集まりました	禁母縁
	厭苦縁
	欣浄縁
	光台現国
	散善顕行縁 去此不遠
	定善示観縁
	日観
	水観
	地観
	宝樹観
	宝池観
	宝楼観
	華座観
	像観
	真身観
	観音観
	勢至観
	普観
	正宗分
	定善
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
	正宗分
</	

	耆闍分	流通分	得益分											雑想観	
				散善											
				下輩観			中輩観			上輩観					
				転教口称	下下品	下中品	下上品	中下品	中中品	中上品	上下品	上中品	三心		上上品
㊦ それを聞いた大衆が喜び解散しました (流通分のしめくくり)	㊩ 阿難が「城でこんなことがありました」と 説いた(正宗分のしめくくり)	㊪ 釋尊が耆闍崛山に還つてきた (序分のしめくくり)	阿難が「この經の名・要義は？」持無量寿仏名	韋提希は聞き終わつて極樂世界を見た	世福			戒福			行福				遇大凡夫
		名を持て													

『浄土三部経と七祖の教え』勸学寮編	山上のメモ
-------------------	-------

流通分	序分		
	正宗分	依正段	証誠段
	光寿二無量		
難信之法	依報 浄土	正報 仏と聖衆	
	方処 西方	距離 経過・超過	仏 今現在説法
	衆生 無有衆苦	浄土莊嚴	
	一 宝樹圍繞	二 七宝蓮池	三 天樂華雨
	四 化鳥法音	五 微風妙音	仏名
	光明無量	壽命無量	往生の果
	阿毘跋致(不退)の菩薩	一生補処の菩薩	往生の因
	執持名号		
	・諸仏に讃嘆される仏となつた	・阿弥陀仏不可思議功德を信ぜよ	・仏の所説と法門の名を聞く者は不退転を得る
果 できるよになつた			

第2回 『大経』本願文

親鸞聖人が読んだ本願文

『仏説無量寿経延書』(『聖典全書』3巻260頁)

十八 念仏往生願

たとひわれ仏をえたらんに、十方の衆生、至心信樂して、わがくに生ぜんとおもふて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覺を取らじ。たゞし五逆と誹謗正法とをばのぞく。

『教行信証』 「信文類」 (『聖典全書』2-6 7)(『註』212)	『三経往生文類』 (『聖典全書』2-578) 文 (『註』626)	『一念多念証』 意 (『註』115)	『銘文』 (『註』643)	山上のメモ
念仏往生之願 選択本願 本願三心之願 至心信樂之願 往相信心之願	念仏往生の悲願 信樂の悲願	本願 選択本願		復名・標願 亦可名
たとひわれ仏 を得たらむに 十方の衆生	たとひわれ仏を 得たらむに 十方の衆生		もしわれ仏を得たらん とき 十方のよろづの衆生	
心に至し信樂 して わが国に生と 欲ふて 乃至	至心信樂して、 わが国に生れむ と欲ふて 乃至		わが真実なる誓願を 信樂すべしとすすめ 安樂浄土に生れんと おもへ 遍数の定まりなき 時節を定めざる 如来のちかひの名号を となへんことをすすめ	衆生の 往相 (因) こんな 方法で
十念せむ	十念せむ	称名の遍数 さだまらず 一念にかぎ らず	十念の御な をとなへんも の、	衆生の 往相 (果) すくえ
もし生れざれ ば	もし生れずは		もしわがく にに生れず は	
正覺を取らじ と	正覺を取らじと	仏に成らじ	仏に成らじ	衆生の 往相 (果) すくえ ほとけ になり たい
ただ五逆と誹 謗正法を除く	ただ五逆と正法 を誹謗せむを除 かむ		ただ除く 五逆のつみびとをきら ひ、誹謗のおもきとが をしらせん	

※この表は抜き書きですので具には本文をお読み下さい

※宗祖の引文は他に

『如来二種廻向文』(漢文で引文)(『註釈版』721頁)

『四十八誓願』には「十八 念仏往生之願 往相回向」の標があります。〔聖典全書』
2巻1012頁)

現代語訳してみよう

(本願寺出版社『浄土三部経』現代語版82頁)

わたしが仏になるとき、すべての人々が心から信じて、わたしの国に生れたいと願ひ、わずか十回でも念仏して、もし生れることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。ただし、五逆の罪を犯したり、仏の教えを誇るものだけは除かれます。

(梯實圓和上『教行信証の宗教構造』334頁)

たとい私が仏陀になりえたとしても、十方世界のすべての衆生が、私の真実なる誓願を疑いなく信じ、わが国へ生まれようとおもうて、わずか十遍であつても私の名を称えているのに、もし生まれさせることができないようならば、私は仏陀にはなるまい。ただ五逆罪をつくり、仏法を誹謗しているようなものは除く

設我得仏 …… 不取正覚

誓いを表すために仮定と二重否定の文章構造で述べられる (読みにくいやんか「ゴロ」)

設我得仏

たとい私が仏陀になりえたとしても

若不生者不取正覚

もし生まれさせることができないようならば、私は仏陀にはなるまい。

四十八願

願いをストレートに本人の言葉「セリフ」のように表現したら

仏 こんな生き方したい 第十二願 光明無量

第十三願 壽命無量

第十七願 諸仏称名

淨土 こんな国を建てたい 第三十一願 国土清淨

第三十二願 妙香合成

衆生 このように救いたいその他の願

A 淨土に生まれたらこんな生き方してもらいたい

B こんな方法で救えるようになりたい

C 他の仏国にも私の光と名を届けたい

四十八箇条の誓い

衆生に「輝いた正しい生き方をできるようにになりなさい」と教えるのが諸仏

「輝いた正しい生き方ができないあなたを救える仏に成ってみせる」と誓ったのが法蔵

菩薩

スキルアップするのは衆生ではなくわたし法蔵菩薩

十方衆生

あなたがどんな場所でどんな時代に生きていて、どんな境遇におかれていても

至心信樂欲生我国

ほんまに疑いなく生まれるとおもうてもらえるようになりたい

乃至十念

一生涯あなたに用きつづけることができるようになりたい

若不生者不取正覚

あなたに輝く生き方を実現させるのは私の命がけの誓いです

唯除五逆誹謗正法

苦しみをまき散らして平気なあなた、私の心を裏切るあなたには

最終手段の言葉で気づいてもらうしかない。

「お前だけはゆるさん」

機受の全相

『歎異抄』12(『註釈版』839頁)

至心信樂欲生 本願を信じ
 乃至十念 念仏を申さば
 若不生者 仏に成る

《私》このように救われる		《仏》こんな方法で 救えるようになりたい	
信 因	ほんまに まこと 種〓因〓たね うたがいなく	至 誠 虚空	ほんまもんや 一念一刹那無不清淨無不真心 清淨眞實 み〓果 まちがいない 無碍の信心 決定摂取
	満入 尊重 忠信 往生の志願が満たされて 安堵してめでよろこぶ 当来往生成仏するよろこび すでに実現しているよろこび 遇法 お育てに遇つてきた 救いの声を聞ける身になった うまれるとおもつて 覚知 決定要期	樂 欲願愛悦 歡喜 賀慶	うまれるんやで 大悲招喚の勅命 やつてもやつても手柄がないような 行を選択して
証 果	うまれる	生	うまれさせる
	一生涯 念々に無上功德 仏力によつて 名を称えて 「たすかる」南無阿弥陀仏	念 声 称功がない 数を限定しない 乃至十	名を称えておくれ できるよになつたぞ 「たすける」南無阿弥陀仏

「信文類」 解釈 結(『註釈版』229頁)

【18】 しかれば、もしは行、もしは信、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまふところにあらざることあることなし。因なくして他の因のあるにはあらざるなりと、知るべし。

「証文類」 四法結釈(『註釈版』312頁)

もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清淨願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因、淨なるがゆゑに果また淨なり。

唯除

五逆 殺父 殺母 殺阿羅漢 出仏身血 破和合僧 (『註釈版』303頁)

破塔燒藏盜財 謗法 還俗出家人 三乗の五逆 謗無因果

罪の軽から重への順

『大乘義章』卷七(『大正藏』44-610a)

次辨輕重。殺父最輕。殺母次重。殺阿羅漢罪復轉重。出仏身血轉轉弥重。破僧最重。故成実云。破僧最重。何故如是。離三宝故。令僧離仏。亦碍法宝。又於仏所起深嫉心。違轉正法。復惱大衆。応入聖者。不得入聖。坐禪學問誦誦禮拜。如是等事。一切不得。所以最重(此三門竟)。

謗法 無仏無仏法 無菩薩無菩薩法 相手の存在を認めて否定 (『註釈版』298頁)

一闡提 無関心 (『註釈版』266頁)

五逆と謗法の重さ 『論註』上卷八番問答(『註釈版』296頁・『註釈版七祖篇』24頁)

『銘文』(『註釈版』644頁)

「唯除五逆誹謗正法」といふは、「唯除」といふはただ除くといふこととなり、五逆のつみびとをさらひ、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつの罪のおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせんとなり。

『和語灯録』十二箇条問答 第十一(『聖典全書』6-574)

問ていはく。本願は惡人をきはねばとて。このみて惡業をつくる事はしかるへしや
答ていはく。佛は惡人をすて給はねども。このみて惡をつくる事。これ佛の弟子にはあらず。一切の佛法に惡を制せずといふ事なし。

(中略)

たとへは人のおやの。一切の子をかなしむに其中によき子もあり。あしき子もあり。ともに慈悲をなすといへとも。惡を行ずる子をは目をいからかし。杖をささげて。いましむるがことし。

(中略)

惡人までをもすて給はぬ本願としらんにつけては。いよいよ佛の知見をは**つづし**。かなしむし。父母の慈悲あればとて。父母のまへにて惡を行ぜんに。その父母よろこぶへしや。なげきなからず。あはれみながらにくむ也。佛も又もてかくのことし

うたがいなく

の機の内容がこれ。眞實誠がない私。

第3回 『大経』 真実の教

経の大意

『教行信証』教文類『註釈版』135頁)

真実の教

弥陀 功德の宝を施する

……仏の名号をもつて経の体とす

釈迦 群萌を拯ひ恵むに真実の利をもつてせんと欲す

……本願を説きて経の宗致とす

真実の教

Q 釈尊は何をしにこの世にお出ましになったか？

A 弥陀の本願を説くため。(このたびの説法)

「正信偈」 如来所以興出世 唯説弥陀本願海

Q 弥陀の本願を説くことがなぜ本懐(ほんがゐ)本来のふところのうちにある思いといえるか？

A 今から説く教えが真実教であるから。

Q なぜ真実教と言えるのか？

A ①無量寿経説時に五徳瑞現があったこと。

釈尊 キラキラに輝いていた

②無量寿経の法義は真実の利であるから。

中身 ほんまもんやから

①五徳瑞現

五徳瑞現の文(『註釈版』8頁)

光顔巍巍

巍巍、巍巍焉、巍巍乎、巍巍然

高く大きなさま。また富貴にして位高いかめしいさま。

(本願寺出版社『浄土三部経』現代語版2頁)

世尊、今日は喜びに満ちあふれ、お姿も清らかで、そして輝かしいお顔がひとときわ気高く見受けられます。まるでくもりのない鏡に映る姿が透きとおっているかのようでございます。そして、その神々しいお姿がこの上なく超えすぐれて輝いておいでになります。わたしは今日までこのような尊いお姿を見てまつたことがございません。そうです、世尊、わたしが思いますには、(一)世尊は、今日、世の中でもっとも尊いものとして、特にすぐれた禅定に入っておいになります。

(二)また、煩惱を断ち悪魔を打ち負かす雄々しいものとして、仏のさとりの世界そのものに入っておいになります。

(三)また、迷いの世界を照らす智慧の眼として、人々を導く徳をそなえておいでになります。

(四)また、世の中でもっとも秀でたものとして、何よりもすぐれた智慧の境地に入っておいになります。

(五)そしてまた、すべての世界でもっとも尊いものとして、如来の徳を行じておいでになります。

「諸経讃」88首(『註釈版』572頁)

久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあはれみて

釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には応現する

『大経』華光出仏(『註釈版』40頁)

浄土の蓮華の光が仏となつてこの世に出現されたのが釈尊

釈尊は本地弥陀の本願をあらわすために出現された

②真実の利

Q 「②無量寿経の法義は真実の利であるから。」とどうしていえるのか。

A 無量寿経が真実であることをここに經典自身が語っているから真実経である。

出世本懐の文『註釈版』9頁)

(本願寺出版社『浄土三部経』現代語版12頁)

如来はこの上ない慈悲の心で迷いの世界をお哀れみになる。世にお出ましになるわけは、仏の教えを説き述べて人々を救い、まことの利益を恵みたいとお考えになるからである。

『教行信証』教文類引用の『如来会』

(本願寺出版社『顕浄土真実教行証文類』現代語版13ページ)

すべての仏がたは大いなる慈悲の心から人々を救うために世に現れるのであり、それは優曇華が咲くほどきわめてまれなことである。今、わたしが仏としてこの世に現れた。

Q 真実の利とは何か。

A 流通分に示される。名号を聞き称える者に得られる「大利・無上の功德」をいう。

『註釈版』81頁)

「それかの仏の名号を聞くことを得て、 歓喜踊躍して乃至一念せんことあらん。 まさに知るべし、この人は大利を得とす。 すなはちこれ無上の功德を具足するなりと。」	名号を聞く 名号を称える最小単位の声の念仏によつて 当来利益 現生の利益
--	---

(中略)

もし衆生ありてこの経を聞くものは、無上道においてつひに退転せず。

(中略)

それ衆生ありてこの経に値ふものは、意の所願に随ひてみな得度すべし

Q 無量寿経はどのようにして真実の利、無上功德を恵むのか。

A 本願の名号を説き与えることによつて群萌をすくう経である。

聴聞

仏陀の説法

さとの内容・真理

たとえば「人生は苦である」

転法輪(法が機能する)のは

× 人生に苦を感じない人 勝ち組 馬の耳に念仏

○ 人生に何らかの問題にぶち当たった人、今直面している人
生死という壁にぶち当たって問題意識を持つ 私が生きている価値があるのか

「人生は苦である」「そのとおりですね」と受け容れることができる。むしろその言葉がひびく。
問いを持つてききたいと思う

聴聞

聞く耳をもつ者に転法輪が成立する 法をきくことが許される

立派になつてきくのではない

そこに居ることがゆるされる(左訓『註釈版』45頁)

聞

居ていい場所が用意されていて、そこに居ると 思いがけない声が入ってきた

(ABCは別表「48願名と分類」のabcにほぼ対応)

序分		正宗分		流通分	
証信序	發起序	法蔵發願	法蔵修行	彌陀果徳	衆生往生因
六事成就 八相化儀	五徳瑞現 出世本懷	五十三仏 讃仏偈 思惟摂取 四十八願 重誓偈		十劫成道 光明無量 十二光 三塗見光 壽命無量 聖衆無量 宝樹莊嚴 道樹樂音莊嚴 講堂宝池莊嚴 眷属莊嚴 華光出仏	第十一・十七 ・十八願成就 三輩往生 往觀偈
新制三部経で読経するところ		因		衆生	
ええ顔色してはりまん 真実の利を恵んで拯いたいねん 聴いてや		仏 こんな生き方したい 浄土 こんな国を建てたい 衆生 このように救いたい、		果 できるようになった 仏 こんな生き方ができるようになった	
				国土 こんな世界が見えるようになった	
				衆生 こんな救い方ができるようになった	
				A 浄土に生まれたらこんな生き方しても らいます	
				C 無量仏国にも私の光と名が届いている	
				B こんな方法で救えるようになった	
				自力の人は化土に往つてもらいます	
				衆生往生因の重頌	
				A 浄土に生まれたらこんな生き方しても らいます	
				勸誡 氣いつけやあ	
				彌勒諸天人等 彌勒諸天人等 彌勒 阿難 阿難 阿難及慈氏菩薩 彌勒	
				名号を聞く 大利を得る 無上功德を具足	

できるようになった

おさとりの世界からは仏も国土も衆生も分別がないのですが、分別の世界に生きている私たちに受け取れるように、因果という分別の言葉でお示しくださるのが仏陀の言葉です。

仏 こんな生き方ができるようになった 弥陀果徳

国土 こんな世界が見えるようになった 弥陀果徳

衆生 こんな救い方ができるようになった

A 浄土に生まれたらこんな生き方してもらいます

弥陀果徳 眷属莊嚴

清浄なる身体、諸の神通力、住居・衣服・食事、諸仏供養のための華・香・莊嚴具などが過不足無く得られる。

第十一願成就 自然虚無の身無極の体(『註釈版』37頁脚注参照)

衆生往生果

第二十二願成就 従果還因の菩薩になつてもらいます 例：観音勢至

第三・四願成就 三十二相を具足して智慧を満足してもらいます

第五・十願成就 超人的・超自然的な力を具え五濁悪世で活動

第二十三・二十四願成就 十方の諸仏に往詣し如意供養できます

講堂に集会して阿弥陀仏のお説法にあつてもらいます

第二十五願成就 大慈悲心を得て、自在に法を宣説・教化してもらいます

仏としての活動をしてもらいます(仏の眼・無碍の智をもって演説し、

衆生煩惱の患いを除滅してもらいます)

C 無量の仏国の衆生に私の光と名が届いている

弥陀果徳 華光出仏

阿弥陀仏の分身 **釈尊の説法**

『如来会』『聖典全書』一卷321頁)

現往東方為衆説法……南西北方四維上下亦復如是

『小経』六方段

B こんな方法で救えるようになった

衆生往生因

衆生を正定聚ならしめる

其有衆生彼国者皆悉住於正定之聚所以者何彼仏國中無諸邪聚及不定聚

(正定聚 浄土に往生することが正しく定まり、必ずさとりを開いて仏に成ることが決定しているともがらをいう。『註釈版』1500頁)

「証文類」【一】願成就の文 (必至滅度)

諸仏(釈迦)の説法によつて名号が回向される

十方恒沙諸仏如来皆共讃嘆無量寿仏威神功德不可思議

「行文類」【一】願成就の文 (諸仏称揚・諸仏称名・諸仏咨嗟・往相回向・

選択称名)

名号のいわれをうたがいに聞く時

諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念

「信文類」【4】本願成就の文 【29】本願信心の願成就の文

正定聚になる

至心廻向願生彼国即得往生住不退転唯除五逆誹謗正法

「信文類」【4】本願成就の文 【40】本願の欲生心成就の文

本願成就文 機受の極要

機受の全相は前回の本願文を参照してください。

真実の利

今は弥勒付属の文で窥います(『註釈版』81頁)

「それかの仏の名号を聞くことを得て、

歡喜踊躍して乃至一念せんことあらん。

まさに知るべし、この人は大利を得とす。

すなはちこれ無上の功德を具足するなりと。」

名号を聞き

名号を称える最小単位の一声の念仏には

当来の利益 (必至滅度)があり

現生の利益 (皆悉住於正定之聚)がある

極要

聞其名号信心歡喜乃至一念

至心廻向

願生彼国

即得往生住不退

名号を聞く＝信心歡喜

(信心も利益も賜ったもの)

(信心歡喜の言い換え)

現生の利益(即時に正定聚の位に即位する)

信心正因

往生成仏の因は信心

即得往生

信益同時

正定滅度

現生に不退転

当来に往生

如来の回向

『註釈版』41ページ脚注「至心に回向したまへり」を読んでください
親鸞聖人の読み

至心に回向せしめたまへり。 信（『信文類』註『212頁』【4】

至心回向したまへり。 信【40】略典【4】 三経往【1】 延書

至心に回向したまへり。 信【61】略典【30】

至心 仏のまことごころ

真実 いつわることなく、へつらうことなく、自らも真実に生き、人々を本当に救いきる

これができる方は 自己中心の妄念を破り 怨親平等 自他一如

自他一如 若くは生者不取正覚

回向 仏が自己の徳を衆生に施与する

信心も

上（聞其名号信心歓喜）

利益も

下（即得往生住不退転）

如来からたまわったもの

願生彼国

欲生我国 信樂の義別 如来召喚の勅命

願生彼国 釈尊の發遣

その他この文からわかること

聞信義相

聞即信 無有疑心

信即聞 本願力廻向

信願交際

信 たのむ 名号に対する

願 ねがう 浄土往生に対する

歓喜初後

信樂＝信心歓喜 乃至＝一生涯の相続 一念＝初起

歓喜は初後一貫する 行者の三業に現れたものではない

……などなど

「資料」親鸞聖人が読んだ本願成就文

一般的な漢文『仏説無量寿経』『聖典全書』1巻43頁)

あらゆる衆生その名号を聞きて信心歓喜して、乃ち一念に至るまで心を至し廻向して彼の国に生ぜむと願すれば即ち往生を得不退転に住す。

親鸞聖人『仏説無量寿経延書』『聖典全書』3巻287頁)

あらゆる衆生、その名号をききて信心歓喜し、乃至一念せん。至心廻向したまへり。かのくに生ぜんと願すれば、すなはち往生をえ、不退転に住す。たゞし五逆と誹謗正法とをばのぞく。

引文

『顕浄土真実教行証文類』『教行信証』『本典』『広文類』

「信文類」

大信釈 引文

(『註釈版』212頁)全文

三一問答 法義釈 信樂釈

(『註釈版』236頁)ゝ乃至一念

同 同 欲生釈

(『註釈版』241頁)至心廻向ゝ

同 同 信一念釈

(『註釈版』250頁)ゝ住不退転

明所被機

(『註釈版』296頁)唯除ゝ

『浄土文類聚鈔』『略典』『略文類』

三法列釈

(『註釈版』478頁)

問答分

(『註釈版』492頁)

問答分

(『註釈版』493頁)

『三経往生文類』

(『註釈版』625頁)

『一念多念文意』『一念多念証文』『一多証文』

(『註釈版』677頁)

『唯信鈔文意』

(『註釈版』703頁)

本文	諸有衆生	聞其名号	信心	歡喜	乃至	一念
「信文類」信一念 釈『註釈版』250-251頁【6 01【65】	アラユル（右訓）	「聞」といふは、衆 生、仏願の生起本 末を聞きて疑心あ ることなし、これを 聞といふなり。	「信心」といふは、 すなはち本願力回 向の信心なり。	「歡喜」といふは、 身心の悦予を形す の貌なり。	「乃至」といふは、 多少を撰するの言 なり。	【60】顕 信樂 開發時剋之極促 彰 広大難思慶心 【65】信心二心なき がゆゑに一念とい ふ。これを一心と 名づく。一心はす なはち清浄報土の
『一念多念文意』『註釈版』 677頁	十方のよろづの衆生	本願の名号をきくとのた まへるなり。 きくといふは、本願をき きて疑ふところなきを 「聞」といふなり。 またきくといふは、信心 をあらはす御のりなり。	如来の御ちかひをききて 疑ふところのなきなり。	「歡喜」といふは、「歡」は 身をよろこばしむるな り、「喜」はこころによろ こばしむるなり、うべきこ とをえてんずと、かねて さきよりよろこぶこころ なり。	「乃至」は、おほきをもす くなきをも、 ひさしきをもちかきを も、さきをものちをも、 みなかねをさむることば なり。	「一念」といふは、信心を うるときのきはまりをあ らはすことばなり。
『唯信鈔文意』 【註釈版】103頁						
山上メモ	あらゆるよろづは万機 諸の有は迷いの悪機	本願の名号を聞くと仰 せられている 「きく」本願のいわれを聞 いて疑いが無くなっている 状態を「聞」という 「きく」本願の信心の特 色をあらわすみことばで ある。	無疑心	歡 身のよろこび 喜 心のよろこび 得なければならぬこと を得させていただけに ちがいないと、あらかじ めさきだつてよろこぶこ ろ	多少（行一念） 久近・先（信心）後（称名） すべてかねおさめる	信心を得る時の極まり 後の称名が現れる名号 領受の初めの時 無二心

至心	回向	願生	彼国	即	得往生 住不退転
真因なり。					
「至心回向」といふは、「至心」は真実といふことばなり、真実は阿弥陀如来の御ころなり。	「回向」は、本願の名号をもつて十方の衆生にあたへたまふ御のりなり。	「願生彼国」といふは、「願生」は、よろづの衆生、本願の報土へ生れんとねがへとなり。「彼国」はかのくにといふ、安楽国をしへたまへるなり。	「即得往生」といふは、「即」はすなはちといふ、ときをへず、日をもへだてぬなり。また「即」はつくといふ、その位に定まりつくといふことばなり。「得」はうべきことをえたりといふ。真実信心をうれば、すなはち無碍光仏の御ころのうちに摂取して捨てたまはざるなり。摂はをさめたまふ、取はむかへると申すなり。をさめとりたまふとき、すなはち、とき・日をもへだてず、正定聚の位につき定まるを「往生を得」とはのたまへるなり。	「即得往生」は、信心をうればすなはち往生すといふ、すなはち往生すといふは不退転に住するをいふ、不退転に住すといふはすなはち正定聚の位に定まるとのたまふ御のりなり、これを「即得往生」とは申すなり。「即」はすなはちといふ、すなはちといふはときをへず日はときをへず日をへだてぬをいふなり。	真実 阿弥陀仏の御心
真実の徳のすべてを南無阿弥陀仏という本願の名号にこめて、十方世界の生きとし生けるすべてのものに与えたまう	「阿弥陀仏が本願をもつて成就された真実の報土に生まれようと願え」と釈尊がすべての者に勧められている言葉	即時	即時	得なければならぬこと	即時 摂取不捨の利益信心
即位 正定聚の位につきさだまる					

※「唯除」以下は省略します

第4回 『観経』

得益分	正宗分															序分																			
	定善															証信序																			
	日観 水観 地観 宝樹観 宝池観 宝楼観 華座観 像観 真身観 観音観 勢至観 普観 雑想観															發起序 化前序 禁父縁 禁母縁 厭苦縁 欣浄縁 光台現国 散善顕行縁 去此不遠 定善示観縁																			
	上上品			三心			上中品			上下品			中上品			中中品			中下品			下上品			下中品			下下品			転教口称				
流通分	依 正 依 真 真 正 真															行 観 依 正 真 真 正 真										行									
	三心 三福															定散の 諸善(二善)										顯									
	三福															三輩										彰(隠密)									
	利他通入の一心															如來の弘願(住立空中尊) 如來の弘願(光明攝取) 彌陀大悲の本願を開闡す										名を持て									

曇鸞大師『往生論註』下 起観生信章(『註釈版七祖篇』106頁)

【54】 いかんが觀察する。智慧をもつて觀察し、正念にかしこを觀ず。如実に毘婆舍那を修行せんと欲するがゆゑなり。

「毘婆舍那」を訳して「観」といふ。ただ汎く観といふには、義またいまだ満たず。なにをもつてこれをいふとならば、身の無常・苦・空・無我・九想等を觀するがごときをも、みな名づけて観となせばなり。また上の木の名の椿・柘を得ざるがごとし。

「毘婆舍那」を觀といふはまた二の義あり。

一には、ここにありて想をなしてかの三種の莊嚴功德を觀ずれば、この功德如実なるがゆゑに、修行するものもまた如実の功德を得。如実の功德とは、決定してかの土に生ずることを得るなり。

二には、またかの浄土に生ずることを得れば、すなはち阿弥陀仏を見たてまつり、未証浄心の菩薩、畢竟じて平等法身を証することを得。浄心の菩薩と上地の菩薩と、畢竟じて同じく寂滅平等を得るなり。このゆゑに「如実に毘婆奢那を修行せんと欲するがゆゑなり」といへり。

【55】 かの觀察に三種あり。なんらか三種。一にはかの仏国土の莊嚴功德を觀察す。二には阿弥陀仏の莊嚴功德を觀察す。三にはかの諸菩薩の莊嚴功德を觀察す。

心にその事を縁ずるを「観」といふ。觀心分明なるを「察」といふ。

善導大師 『観經四帖疏』玄義分釈名門 (『註釈版七祖篇』304頁)

【9】 「観」といふは照なり。つねに淨信心の手をもつて、もつて智慧の輝を持ち、かの弥陀の正依等の事を照らす。

親鸞聖人 『一念多念証文』(『註釈版』691頁)

【19】 『浄土論』にはく、「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足に、まうあうてむなくすぐるひとなし、よくすみやかに功德の大宝海を満足せしむ」とのたまへり。「観」は願力をここにうかべみると申す、またしるといふところなり。「遇」はまうあふといふ、まうあふと申すは本願力を信ずるなり。

Q 親鸞聖人の観經の読み方如何

A 願と彰の読み方がある。

願 文の表にはつきりと願われているいわれを読む

彰(隱密) 密かに隠れて彰わされているいわれを読む

Q 文証如何

A 「化身土文類」観經隱願(『註釈版』381頁)

釈家の意によりて『無量寿仏観經』を案ずれば、願彰隱密の義あり。

願といふは、すなはち定散諸善を願し、三輩・三心を開く。しかるに二善・三福は報土の真因にあらず。諸機の三心は自利各別にして、利他の一心にあらず。如来の異の方便、欣慕浄土の善根なり。これはこの經の意なり。すなはちこれ願の義なり。

彰といふは、如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す。達多(提婆達多)・闍世(阿闍世)の惡逆によりて、釈迦微笑の素懷を彰す。韋提別選の正意によりて、弥陀大悲の本願を開闡す。これすなはちこの經の隱彰の義なり。

Q 釈家の意とは？

A 善導大師『観經四帖疏』の意で、特に「玄義分」序題門の要弘二門を承けている。

善導大師 『観經四帖疏』「玄義分」序題門(『七祖篇註釈版』300頁・『註釈版』383頁)

ただ願はくは如来、われに思惟を教へたまへ、われに正受を教へたまへといふによりて、しかも娑婆の化主(釈尊)はその請によるがゆゑにすなはち広く浄土の要門を開き、安樂の能人(阿弥陀仏)は別意の弘願を願彰したまふ。その要門とはすなはちこの『観經』の定散二門これなり。

「定」はすなはち慮りを息めてもつて心を凝らす。

「散」はすなはち惡を廢してもつて善を修す。

この二行を回して往生を求願す。

弘願といふは『大經』(上・意)に説きたまふがごとし。

Q 願彰、要弘それぞれ内容を示せ

A 願(要門) 定・散の諸善

三輩・三心、二善・三福

彰(弘願) 如来の弘願

利他通入の一心

定 姿勢を正し、雑念を去り、注意力を浄土の一点に集中して、経に説かれているとおりに浄土のすがたを想い描き、仏や菩薩の姿をまのあたり想いうかべていく修行

散 日常的な散り乱れた心のままに、悪行をやめて善き行いを実践していくこと

福 善と同義。自他にしあわせをもたらす行い

行福 大乘の行。自他ともにさとりを完成しようと願う菩提心を起こして、大乘經典を読誦し、そこに説かれているさまざまな善行を自分も行い、人にも勧めていくこと

戒福 部派仏教の戒行。戒律をたもち、生活を浄化していく

世福 父母に孝養をつくし、仁義礼智信といった世俗の生活における徳目を実践していくこと

Q 下品はどんな人？

A 悪業を行ってきた。罪の軽・次・重によって三種に分けた。

Q その人が往生する因行は？

A 散乱心のままに称名をするので散善で、大乘の行なので行福にあたる。

Q 諸善・三心とは？

A 定善・散善の行と信。

Q 定善・散善の行の特徴は？

A 「一人の人生でどれだけ善を行ったかが違う。行が違うので信も違う。したがって往生にも差があるので三種や更に細かく九種の因果が説かれる。千差万別を総じて上中下の三輩という。

Q 諸機の三心とは？

A 至誠心・深心・廻向発願心の三心。

定善と組み合わせ、観念の行を往生行に転換する自力の三心

三福散善と組み合わせ、三福行を往生行と転換する自力の三心

Q 如来の異の方便、欣慕浄土の善根とは？

A 「諸仏如来有異方便」といへり、すなはちこれ定散諸善は方便の教たることを顕すなり。（『註釈版』382頁）

Q 如来の弘願とは？

A 阿弥陀如来のひろく大きな願いで、『無量寿経』に説かれる第十八願の願力によつて往生せしめられることをいう。行文類に釈がある。『註釈版』68頁）また、『観経』では住立空中尊と光明攝取が弘願法。

「行文類」大行釈 引文（『註釈版』68頁）

【29】 またいはく（玄義分三〇一）、「弘願といふは『大経』の説のことし。一切善惡の凡夫、生ずることを得るは、みな阿弥陀仏の大願業力に乗（乗の字、駕なり、勝なり、登なり、守なり、覆なり）じて増上縁とせざるはなし」と。

『現代語版』 「弘願というのは『無量寿経』に説かれている通りである。善人も悪人もすべての凡夫が往生できるのは、みな阿弥陀仏の大いなる本願のはたらきに乗じる」（乗の字は、かごにのるという駕の意味であり、自力にまさるといふ勝の意味であり、舟にのるといふ登の意味であり、仏に守られているという守の意味であり、おわれ護られるという覆の意味である）」のであり、これをもつともすぐれたはたらしきとしないものはない」

Q 釈迦微笑の素懷とは何か？

A 阿弥陀仏と釈尊が一致して機法の二実を示す。
すなわち最下の悪機が他力に帰することが二尊の意。

Q 彰（弘願）の行は？

A 下下品「具足十念称南無阿弥陀仏」

Q 根拠は如何？

A 「流通分」に名を持つことがこの経の本意であることが知れる。

『観経』（『註釈版』117頁）

仏、阿難に告げたまはく、「この経をば（極樂国土・無量寿仏・観世音菩薩・大勢至菩薩を觀ず）と名づく。また（業障を淨除し諸仏の前に生ず）と名づく。なんぢまさに受持すべし。忘失せしむることなかれ。この三昧を行ずるものは、現身に無量寿仏および二大士を見ることを得。もし善男子・善女人、ただ仏名・二菩薩名を聞くに、無量劫の生死の罪を除く。いかにいはんや憶念せんをや。もし念仏するものは、まさに知るべし、この人はこれ人中の分陀利華なり。観世音菩薩・大勢至菩薩、その勝友となる。まさに道場に坐し諸仏の家に生ずべし」と。仏、阿難に告げたまはく、「なんぢ、よくこの語を持て。この語を持てといふは、すなはちこれ無量寿仏の名を持てとなり」と。

善導大師『観経四帖疏』流通分（『註釈版七祖篇』500頁）

六に「仏告阿難汝好持是語」より以下は、まさしく弥陀の名号を付属して、退代に流通せしめたまふことを明かす。上來定散兩門の益を説くといへども、仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもつぱら弥陀仏の名を称せしむるにあり。

Q 願の義の称名と、彰の義の称名との違いは何か？

A 願の称名は自業自得の道理で散善の劣行。

彰の称名は阿弥陀仏の願力に乗託している行業で、定善でも散善でもない。選択本願の最勝の行。

Q 利他通入の一心とは何か？

A 利他とは利他力のこと、阿弥陀仏が衆生に恵み与えるはたらき通入とは定機も散機も同じく願力に乗じて浄土へ通入すること

一心とは三心即一の深心。自利格別の三心に対する。たまわりたる信心。

『大経』至心・信樂・欲生我国

『観経』至誠心・深心・廻向発願心

【参考】九品の行と来迎と讃嘆

上品(行福) 上上品

因

三種の心を発して即便往生す。なんらをか三つとする。一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心なり。三心を具するものは、かならずかの国に生ず。また三種の衆生ありて、まさに往生を得べし。なんらをか三つとする。一つには慈心にして殺さず、もろもろの戒行を具す。二つには大乘の方等經典を誦誦す。三つには六念を修行す。廻向発願してかの国に生ぜんと願ず。この功德を具すること、一日乃至七日して

来迎

阿弥陀如来は、観世音・大勢至・無数の化仏・百千の比丘・声聞の大衆・無数の諸天・七宝の宮殿とともに「現前す」。観世音菩薩は金剛の台を執りて、大勢至菩薩とともに行者の前に至る。阿弥陀仏は、大光明を放ちて行者の身を照らし、もろもろの菩薩とともに手を授けて迎接したまふ。観世音・大勢至は、無数の菩薩とともに行者を讃歎して、その心を勸進す。行者見をはりて歡喜踊躍し、みづからその身を見れば、金剛の台に乗ぜり。仏の後に随従して、弾指のあひだのごとくにかの国に往生す。

讃嘆

観世音・大勢至は、無数の菩薩とともに行者を讃歎して、その心を勸進す。

上中品

かならずしも方等經典を受持し誦誦せざれども、よく義趣を解り、第一義において心驚動せず。深く因果を信じて大乘を謗らず。

上下品

因果を信じ大乘を謗らず。ただ無上道心を発す。

阿弥陀仏は観世音・大勢至・無量の大衆と「ともに」、眷属に圍繞せられて、紫金の台を持たしめて、行者の前に至る。

（法子、なんぢ大乘を行じ第一義を解る。このゆゑに、われいま来りてなんぢを迎接す）

（法子、なんぢいま清浄にして無上道心を発せり。われ来りてなんぢを迎ふ）

中上品 戒福(出家)

五戒を受持し、八戒斎を持ち、諸戒を修行して、五逆を造らず、もろもろの過患なからん。

中中品 同(在家)

もしは一日一夜に八戒斎を受持し、もしは一日一夜に沙弥戒を持ち、もしは一日一夜に具足戒を持ちて、威儀欠くることなし。

中下品 世福

父母に孝養し、世の仁慈を行ぜん。

下上品

もろもろの悪業を作らん。方等經典を誹謗せずといへども、かくのごときの愚人、多く衆悪を造りて慚愧あることなけん。命終らんとするとき、善知識、ために大乘十二部經の首題名字を讀ずるに遇はん。かくのごときの諸經の名を聞くをもつてのゆゑに、千劫の極重の悪業を除却す。智者また教へて、合掌・叉手して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するがゆゑに、五十億劫の生死の罪を除く。

下中品

五戒・八戒および具足戒を毀犯せん。

僧祇物を偷み、現前僧物を盗み、不淨說法して、慚愧あることなく、もろもろの悪業をもつてみづから莊嚴す。命終らんとするとき、地獄の衆火、一時にともに至る。善知識の、大慈悲をもつて、ために阿弥陀仏の十力威徳を説き、広くかの仏の光明神力を説き、また戒・定・慧・解脱・解脱知見を讃ずるに遇はん。この人、聞きをはりて八十億劫の生死の罪を除く。

下下品

不善業たる五逆・十悪を作り、もろもろの不善を具せん。かくのごときの愚人、悪業をもつてのゆゑに惡道に墮し、多劫を経歴して苦を受くること窮まりなかるべし。

善知識の種々に安慰して、ために妙法を説き、教へて念仏せしむるに遇はん。この人、苦に逼められて念仏するに違あらず。善友、告げていはく、へなんちもし念ずるあたはずは、まさに無量寿仏(の名)を称すべしと。かくのごとく心を至して、声をして絶えざらしめて、十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するがゆゑに、念々のなかにおいて八十億劫の生死の罪を除く。

阿弥陀仏は、もろもろの比丘・眷属のために圍繞せられて、金色の光を放ちて、その人の所に至る。

阿弥陀仏のもろもろの眷属とともに金色の光を放ち、七宝の蓮華を持たしめて、行者の前に至りたまふを見る。

そのときかの仏、すなはち化仏・化觀世音・化大勢至を遣はして行者の前に至らしめ：

行者すなはち化仏の光明の、その室に遍満せるを見たてまつる。

苦・空・無常・無我を演説し、出家の衆苦を離るることを得ることを讃歎す。

〔善男子、なんちがごときは善人なり。三世の諸仏の教に随順するがゆゑに、われ来りてなんちを迎ふ〕

〔善男子、なんち仏名を称するがゆゑに、もろもろの罪消滅す。われ来りてなんちを迎ふ〕

地獄の猛火、化して清涼の風となり、もろもろの天華を吹く。華の上にみな化仏・菩薩ましまして、この人を迎接す。

金蓮華を見るに、なほ日輪のごとくしてその人の前に住せん。

『往生礼讃』『註釈版七祖篇』55頁）（「行文類」引文『註釈版』54頁）

問うていはく、なんがゆゑぞ觀をなさしめずして、ただちにもつばら名字を称せしむるは、なんの意かあるやと。

答へていはく、いまし衆生障重くして、境は細なり心は粗なり。識^{しき}颺^{あが}り、神^{じん}飛^とびて、觀成就しがたきによりてなり。ここをもつて大聖（釈尊）悲憐して、ただちに勧めてもつばら名字を称せしむ。まさしく称名易きに由（由の字、行なり、経なり、従なり、用なり）るがゆゑに、相續してすなはち生ずと。

【現代語版】問うていう。どうして仏のおすがたを觀するのではなく、ただもつばら名号を称えるようにお勧めになるのか、これにはどのような意味があるのか。

答えていう。それは、衆生はさわりが重く、觀する対象が細やかであるのに、心は粗雑であり、思いが乱れ飛んで、仏のおすがたを觀しようとしても成就することができないからである。そこで、釈尊はこれをお哀れみになって、ただもつばら名号を称えることをお勧めになるのである。称名は行じやすいので、相續して往生することができるのである。

第5回 『小経』 ／ まとめ 三経の内容

まず、お聖教と科段とを見て、何が書いてあるか知ろう

『浄土三部経と七祖の教え』勸学寮編

山上のメモ

流通分	正宗 依正段			序分
	証誠段	因果段	光寿二無量	
		執持名号		
難信之法			依報 浄土 正報 仏と 聖衆	方処 西方 距離 経過・超過 仏 今現在説法 衆生 無有衆苦 浄土莊嚴
	・諸仏に讃嘆される 仏となった ・阿弥陀仏不可思議 功德を信ぜよ ・仏の所説と法門の 名を聞く者は 不退転を得る	果 往生した者は 不退の菩薩 一生補処の菩薩 因 往生するには 執持名号	仏名 光明無量 寿命無量	果 できるよ うになった

小経の読み方

- Q 親鸞聖人の小経の読み方如何
 A 顕と彰の読み方がある。
- Q 文証如何
 A 「化身土文類」小経隠顕『註釈版』397頁)

『観経』に准知するに、この『経』にまた顕彰隠密の義あるべし。

顕といふは、経家は一切諸行の少善を嫌貶して、

善本・徳本の真門を開示し、

自利の一心を励まして

難思の往生を勧む。

顕(方便)

彰(真実)

流通分	正宗分			序分
	証誠段	因果段	依正段	
		執持名号	光寿二無量	
難思の往生 一切諸行の少善を嫌貶 善本・徳本の真門を開示 自利の一心				
「執」の言は心堅牢にして移転せざることを彰すなり。「持」の言は不散不失に名づくるなり。 「一」の言は無二に名づくるの言なり。 「心」の言は真実に名づくるなり。 真実難信の法				

彰といふは、真実難信の法を彰す。

(中略)

「執」の言は心堅牢にして移転せざることを彰すなり。

「持」の言は不散不失に名づくるなり。

「一」の言は無二に名づくるの言なり。

「心」の言は真実に名づくるなり。

この『経』(小経)は

大乘修多羅のなかの無問自説経なり。

(↓仏の本意の教説)

三經の大綱、顕彰隱密の義ありといへども、
信心を彰して能入とす。

三經の内容をおさらい

『口伝鈔』（『註釈版』900頁）

大法実 第十八願の内容を広く説き明かした

機権 聞いている方々は浄土から来現された還相回向の菩薩たち

八相成道してさとりを完成したブツダが権（かり）に菩薩や声聞の姿を取って説法を聞きに来られている。説く者（釈尊）と聞く者（菩薩）はおなじスキル。

大経はブツダがブツダに向かって「真実の法は本願の念仏である」と説いた

観 法権 定善・散善は方便

自力修行に堪えられない自身の真実の姿を知らせて自力を捨てさせ、
本願他力の念仏に引き入れる

機実 凡夫（代表 愛憎に翻弄される韋提希）

小 機法合説

嫌貶 不可以小善根福德因縁得生彼国

開示 一日七日の念仏が往生の行

証誠 念仏往生の教説を不可思議であると讃嘆し、真実であると証明
釈尊を讃嘆 五濁悪世に出現して難信之法を説きたもう

「化身土文類」小経隠頭（『註釈版』398頁）

いま三經を案ずるに、みなもつて**金剛の真心**を最要とせり。

真心はすなはちこれ大信心なり。

大信心は希有・最勝・真妙・清浄なり。

なにをもつてのゆゑに、

大信心海ははなはだもつて入りがたし、仏力より發起するがゆゑに。

真実の樂邦ははなはだもつて往き易し、願力によりてすなはち生ずるがゆゑなり。
（中略） 三經一心の義、答へをはんぬ。

（現代語訳版）

いまこの三経をうかがうと、みな決して損なわれることのない真実の心をま
さにかなめとしている。その真実の心とは他力回向の信心である。この信心は、
たぐいまれな、もつともすぐれた、真実の、清らかな心である。どうして信心の
大海には入ることが難しいのかというと、この信心は仏力によつておこるからで
ある。しかし、真実の浄土に往生することはとてもやさしい。それは本願のは
たらきによつてただちに往生できるからである。（中略）

これで、この三経に説く教えはみな他力の信心をかなめとするということに
ついて答えおわった。

三経一論と『教行信証』

『選択集』『註釈版七祖篇』118頁）

初めに正しく往生浄土を明かす教といふは、いはく三経一論これなり。

「三経」とは、一には『無量寿経』、二には『観無量寿経』、三には『阿弥
陀経』なり。

「一論」とは、天親の『往生論』（浄土論）これなり。

あるいはこの三経を指して浄土の三部経と号す。

無量寿経				教行信証				浄土論			
第十八願 大悲願海				第十七願				世尊 帰命尽十方無碍光如来 我一心 願生安樂国			
				真実							
第十八願				信				方便			
第十一願				証							
第二十二願											
第十二願				真仏土				観無量寿経(願の義) 阿弥陀経(願の義)			
第十三願											
第十九願				化身土							
第二十願											

質問 山上の表では下品全体の行を「称名」としていますが、『観経』下中品には「称名」がなく、説法を聞いて臨終を迎えます。間違ってますか。

答え 基本的には下品のやつてきたことは悪業なので表にも「悪業」と書けばよかったと反省しています。罪の軽・中・重の順に上中下を分けて説いていることを再度確認させていただきました。

流通によれば、『観経』は「持無量寿仏名」を説く経です。善導大師・法然聖人・親鸞聖人は『観経』をこのように読んでくださいました。定善も散善も説いてきたけれども、『観経』は本願の称名で善悪すべての者を救済すると説いてありました。私もこれにしたがって読みます。以下関連の文を挙げておきます。

『散善義』流通分(『註釈版』七祖篇500頁)

……『選択集』三輩章(『註釈版』七祖篇1217頁)等、「化巻」(『註釈版』404頁)引文

上來定散両門の益を説くといへども、仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもつばら弥陀仏の名を称せしむるにあり。

『観念法門』(『註釈版』七祖篇630頁)

……『選択集』三輩章(『註釈版』七祖篇1216頁)引文

またこの『経』(同)の下巻(意)の初めにのたまはく、「仏説きたまはく、

へ一切衆生の根性不同にして上・中・下あり。その根性に随ひて、仏(釈尊)、みな勧めてもつばら無量寿仏の名を念ぜしめたまふ。

「化巻」(『註釈版』376頁)

この願(第十九願)成就の文は、すなはち三輩の文これなり、『観経』の定散九品の文これなり。